東南アジア学会会報

2023 年 12 月　　第 119 号

目　次

第 30 期第 1 回理事会摘録……3

東南アジア学会研究集会

「Southeast Asia as Critical Crossroads: Dialogues with Anthony Reid」報告

＜SESSION 1: Reading *A History of Southeast Asia: Critical Crossroads*＞

"Southeast Asian Genius: How the Region Manages Its Diversity?"　Noriyuki Osada　8
"Southeast Asia as Method?"　Akiko Iijima　9
"Towards mainstreaming Southeast Asia: from the viewpoints of history education and scholarship review"　Shiro Momoki　10
"Southeast Asia in Global History: Trade, Economic Growth and the Environment"　Kaoru Sugihara　10
"Social Structures and Historical Conjunctures: A Comparative View from China"　Mio Kishimoto　11

＜SESSION 2: Anthony Reid and Southeast Asian Studies＞

"Stateless Peoples and Diversity in the Age of Nationalism"　Masao Imamura　12
"Women in Southeast Asia from High Modernity Onwards"　Yoko Hayami　12
"Environmental "Turns" in Historiography: Impact on Southeast Asian Studies"　Faizah Zakaria　13
"Economic History and the Chinese Century"　Atsushi Ota　13
"Southeast Asian Studies in US, Australia and Japan: A partly autobiographical comparison"　Anthony Reid　14

＜SESSION 3: Commodity, People and Nature on the Frontier: An Alternative Approach to Southeast Asian History in Japan＞

"Introduction - Commodity, People and Nature on the Frontier: An Alternative Approach to Southeast Asian History in Japan"　Kazufumi Nagatsu　14
"Austronesian Inter-Island Networks and Marine Resources Use: Cases of Prehistoric Island Southeast Asia and Oceania"　Rintaro Ono　15
"Trepang and Manilamen: Sea Cucumbers beyond Southeast Asian History"　Akamine Jun　16
"Mangroves in History: Gates of Parallel Worlds in Vietnam"　Shinji Suzuki　16
"Gambir and its Frontiers in the Southeast Asian Archipelago"　Kei Nishikawa　17
"Complex Realities of Sweet Bananas: A Commodity for Thought on the Crossroad between the Philippines and Japan"　Masako Ishii　17

東南アジア史学会賞受賞者に訊く

第 6 回（2008 年度）受賞者インタビュー　山本博之　19
（聞き手：藤村瞳）

短報

国際ワークショップ"Plural Pasts for Collective Futures in Burma/Myanmar: Histories of Belonging and Identities (Re) Imagined"に参加して　菊池泰平　25

追悼

「池端雪浦先生を偲ぶ」　内山史子　27
訃報：バッダン書店主ファン・チャック・カイン氏　新江利彦　29

地区活動報告……31
新入会員・住所変更など……32
事務局より……36

第 30 期 第 1 回理事会議事録

日時 2023 年 3 月 31 日（金）13:00～16:30
場所 Zoom オンラインミーティング
出席　青山亨、池田一人、石井正子、伊藤友美、岩井美佐紀、岩月純一、太田淳、岡本正明、長田紀之、小座野八光*、片岡樹、菊池陽子、佐久間香子、貞好康志、篠崎香織、菅原由美、関恒樹、津田浩司、長津一史、西芳実、山本博之
委任状 増原綾子、丸井雅子、見市建
欠席　なし

0.　定足数の確認
・出席者数および委任状提出者の合計が 24 人で定足数（16 人）を満たしていることが確認された。

1. 報告事項
（1）　会長（長津）
・特になし

（2）　総務（長田）
・2022 年 12 月に開催した理事予定者会合の議事録が承認された。
・以下に記載した第 30 期の委員（敬称略）が承認された。
総務：下條尚志、小田なら、和田理寛、藤村瞳、南波聖太郎、新谷春乃、中野真備
編集：渡邉暁子、坪井祐司、櫻田智恵、北澤直宏
大会：鈴木佑記、加藤敦典、今村真央
学術渉外：岡田雅志、日下渉、外山文子
情報：大泉さやか、小泉佑介、小金丸美恵
北海道・東北地区：岩澤孝子、西田昌之、西川慧
関東地区：松浦史明、川邊徹、加藤久美子（上智大学）
中部地区：矢野順子
関西地区：宮脇聡史、菊池泰平、師田史子
中国・四国地区：河野佳春、島上宗子、生方史数
九州地区：山口裕子
ハラスメント防止委員会：伊藤未帆、川島緑、村上忠良
・第 21 回東南アジア史学会賞の募集を開始した。
・会員数を確認した。3 月 29 日付会員数は 552 名、うち一般会員 489 名、学生会員 63 名である。

（3）　会計（増原）
・特になし

（4）　大会（太田）
・3 月に大会担当者で会議をおこなった。（詳細は後述）

（5）　編集（片岡）
・前期担当者が 52 号発行の準備を進めている。刊行後に今期への引継ぎをおこなう。

（6）　学術渉外（山本）
・本学会は以下の 4 つの学会連合体に参加している。東洋学アジア研究連絡協議会、地域研究学会連絡協議会、地域研究コンソーシアム、人文社会科学系学協会男女共同参画推進連絡会。
・連絡会議としては人文社会学協会メーリングリストに参加している。
・本学会が協力を表明している研究プロジェクトとして、日本学術会議の「学術の中長期研究戦略」がある。

（7）　教育・社会連携（菊池）
・前期に歴史総合教科書の東南アジア関連人物名と主な事項に関する文献リストの作成を開始。今般リストが完成し、学会ウェブサイトに掲載した。

（8）　情報（岩月）
・ウェブサイトの更新がおおむね完了した。

（9）　地区例会担当（全地区を代表して、菅原）
・3 月 21 日に修論博論発表会を実施した。修

論 7 人、博論 7 人の報告があった。
・今期の地区例会については、対面かオンラインかについては発表者の希望を優先する方針。対面でも実施できるように発表者を探している。
・関西は対面の場合、阪大と京大で実施する。京大の委員はまだ決定していない。

（10） 会長代行（岩井）
・1 月 30 日に長津会長、長田総務理事、岩井前会長、小林前総務理事で打ち合わせを行い、学会賞の問題などについて議論した。

（11） ハラスメント防止（青山）
・これまでにハラスメントに関する相談はない。今後は啓発活動にも取り組んでいく。

2. 審議事項
（1） 学会賞選考委員について
・第 21 回東南アジア史学会賞の選考委員について、長津会長が提案した候補者が承認された。

（2） 研究大会について
・太田・津田両大会理事より、研究大会を 12 月 9～10 日に筑波大学でハイブリッド開催する方向で準備を進めることが提案され、承認された。登壇者・発表者は対面参加。オンライン配信にトラブルが生じても会場での発表は中断しない。オンライン配信は大会担当が行い、会場設営などを会場校が担当する。

（3） 研究集会について
・太田大会理事より、7 月中旬の開催を目指し、3 月末か 4 月初めに公募開始、5 月初めに応募締切というスケジュールで進めていくこと、大会担当の原案として「東南アジア通史と海域からみる地域像：アンソニー・リード氏との対話」（仮）を用意しておくことが提案され、承認された。
・また、同理事から、次年度からはより余裕をもったスケジュールとしていくとの発言があった。
・研究集会開催の時期についての議論もなされた。ある理事からは、会誌刊行の翌月に大会を開催すると会誌について大会で話題にできるのでよいという考え方もあるのではないか、という意見が出された。これに対して、別の理事から、会誌刊行のタイミングは遅れることはあっても早まることはないので、あまり時期を近づけない方がよいのではないかと意見が出された。長津会長より、今回の理事会では毎年の開催時期を決める必要はなく、また、研究集会を年に複数回開催することも可能であることが確認され、本件については引き続き議論を続けていくこととされた。

（4） 若手の発表奨励について
・太田大会理事より、若手の発表を奨励するための募集要項の改訂が提案され、承認された。研究大会・集会ともに若手の積極的な応募をより一層強く呼びかけ、参加および招聘に学会が資金援助することを明記する。
・また、同理事から、研究大会で若手発表の場を設けることについても提案があり、承認された。詳細な形式については、他学会の類似プログラムを参照しつつ整えていくこととされたが、現状では、本発表とは別の時間帯（一般プログラムの前後）に会場横断型のセッションとして実施する案が示された。発表者にメンターやコメンテーターをつける場合には、指導教官との関係が困難にならないよう留意する旨も述べられた。
・ある理事から、若手奨励のためには資金援助だけでなく、発表後に論文にし、会誌に掲載させるまでのサポートも必要ではないかとの意見があった。
・また別の理事からは、これまでに地区例会の企画として、修論・博論発表会が 2 回開催されており、これと大会の若手発表の場との区別はどうなるのかという問題提起がなされた。これに対して太田理事からは、１）大会の若手発表は、地区例会の修論・博論発表会の発表時間（修士：発表 20 分、質疑応答 10 分、博論：発表 30 分、質疑応答 15 分）よりも短くてよいと考えている、２）大会は参加

者も多いので、議論を深めるより、若手研究者の周知の場という性格を強めてはどうか、という意見が述べられた。例会との差異化を図る方向で進めていくことが、理事会で確認された。

（5）　日本学術会議関連問題への対応について

・長津会長から、日本学術会議へ政府が関与することについて他学会から声明が出されており、本学会の取るべき対応について考えたいとの問題提起がなされた。

・山本学術渉外理事から、問題の経緯についての説明があったのち、2022 年 12 月の日本学術会議改正法案に対して、本学会としては、日本学術会議に関すること以外を含め、緊急に対応すべき問題が起こったときにどのように対応するかについて議論しておくべきではないかとの認識が示された。

・今回の日本学術会議改正法案という特定事案への学会の対応に関しては、本学会の理事会として可及的速やかに声明を出すかどうかについて表決がとられた。その結果、学術会議の声明に賛同し、学問の自由を脅かすことに反対する理事会声明を出すことが承認された。

・緊急的な事態一般への対応の仕方については、理想的には会員全員に意見を求めるが、急を要する場合には会長判断に委ねるのか、理事会で審議するのか、あるいは理事有志で意見表明をするのか、地域研究学会連絡協議会（JCASA）などの関連組織から連絡があったときにそこに連なる形をとるのか、もしくは本学会独自の表明とするのか、などの論点が山本理事から提示された。しかし、今回の理事会では具体的な決定には至らず、会則 15 条の内容（理事会の議事は、出席理事の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる）が改めて確認されるにとどまった。

（6）　教育社会連携に関する講演会開催および外部講演者への謝金支払いについて

・菊池教育社会連携理事から、教育社会連携の講演会の開催と、そこで外部の講演者を呼ぶことになった場合に謝金を支払うことについて提案され、承認された。

（7）　その他

・第 2 回理事会は、2023 年 10 月頃に開催する。

東南アジア学会研究集会「Southeast Asia as Critical Crossroads: Dialogues with Anthony Reid」報告

2023 年 7 月 22 日（土）から 23 日（日）の 2 日間にわたって、東南アジア学会研究集会「Southeast Asia as Critical Crossroads: Dialogues with Anthony Reid」を東洋大学にて、対面を重視したハイブリッド方式で開催した（使用言語は英語）。「研究集会」は、2019 年度より東南アジア学会の大会が年 1 回になったことに伴う学会活性化の措置として新たに位置付けられた枠組みであり、2021 年 9 月実施の第 2 回に続き今回が第 3 回目である。

今回は、海域アジア・オセアニア研究（NIHU-MAPS）東洋大学拠点との共催として実施し、会場、当日の会場スタッフ、WebEx でのオンライン配信用などは、東洋大学からの提供を受けた。

広報は、本学会のメーリングリストへの案内を中心に、ほかの一部の研究会・学会のメーリングリストでも宣伝をおこなった。結果として、事前に対面 94 名、オンライン 196 名（対面参加との重複登録あり）の参加登録があり、そのうちの多くが当日に参加した。

研究集会の概要・プログラム、および抄録は以下の通り（敬称略）。

概要（日本語版）

本研究集会の目的は、長らく世界の東南アジア研究を牽引してきたアンソニー・リード氏をゲストに迎え、東南アジア研究のこれまでの成果と今後の可能性を議論することです。リード氏は 1980 年代後半から、アナール派の提唱した「全体史」の観点を東南アジア史に導入し、*Southeast Asia in the Age of Commerce*（1988, 1993）において、民衆生活、経済、労働、宗教、儀礼、食事、女性の役割、物質文化などを鮮やかに描くことで、東南アジア像を一新しました。氏はその後、東南アジアの華人、非国家社会、自然災害についても先駆的な研究を発表し、東南アジア研究のみならず他分野にも多大な影響を与えてきました。

リード氏の近著 *A History of Southeast Asia: Critical Crossroads*（Wiley Blackwell, 2015）は、東南アジア地域全体の歴史を先史時代から現代まで 1 人で描き上げ、自ら「著作のうちでも最も包括的な本」とみなす作品です（邦訳『世界史のなかの東南アジア：歴史を変える交差路』太田淳・長田紀之監訳（名古屋大学出版会、2021））。氏は本書において、多様性を基軸に、環境・ジェンダー・非国家という 3 つの視点から、東南アジアの斬新な全体像を打ち出しました。本研究集会は、この東南アジア像と東南アジア研究のこれからをリード氏と共に考える機会となります。

第一部（1 日目午前）は、研究者が『世界史のなかの東南アジア』を論じる書評シンポジウムです。リードが描く東南アジア通史を、登壇者が異なる視点から評し、リード氏が応答します。

第二部は、まずジェンダー、環境、経済史、非国家、ナショナリズムなど、リード氏が長い研究人生において開拓してきたテーマを取り上げ、彼の貢献を確認するとともに、東南アジア研究の今後の展望を論じます。続いてリード氏が現在進めている、10 ヶ国における 70 年間の東南アジア研究を半自伝的にふり返るプロジェクトについて、リード氏自身がその成果の一部をお話しします。

第三部（2 日目午前）は、商品としての自然資源の利用を手がかりに、商業を通して生成した東南アジアのフロンティア社会がいかに過去から連続しているのか、あるいは断絶しているかを探ります。歴史学を専門としない地域研究者が、フィールドワークを出発点として周縁、境域から東南アジア（史）の可能性と意義をリード氏とともに考えます。

概要（英語版）

Anthony Reid has been a pioneering scholar who has led Southeast Asian Studies for many decades. Since the late 1980s, Reid has been producing groundbreaking studies by

introducing the method of "total history" from the Annales school. His vivid descriptions of livelihoods, economy, labor, religion, ritual, diet, women's activities, and material culture presented in his *Southeast Asia in the Age of Commerce* (1988, 1993) have irrevocably changed our understanding of Southeast Asia. After *the Age of Commerce*, he continued to explore new themes including Chinese in Southeast Asia, stateless people, natural disasters, among others, and advanced new projects on a wide range of topics. His contributions, influences, and impacts have been extensive and profound in not only Southeast Asian Studies but also a number of adjacent disciplines.

His latest monograph, *A History of Southeast Asia: Critical Crossroads*, is a monumental, single-authored work, covering the region's entire history from the ancient to the present. Through this book, Reid redefines Southeast Asia as a region of diversity, emphasizing three aspects: natural environment, gender balance, and stateless society.

This two-day symposium, *Southeast Asia as Critical Crossroads: Dialogues with Anthony Reid*, will examine the achievements of Southeast Asian Studies and explore its future possibilities.

On the first day, the symposium consists of two sessions. We will first discuss *A History of Southeast Asia: Critical Crossroads* from multiple perspectives. Five reviews will be followed by a reply by the author. In the second session, panelists will assess Reid's contributions to Southeast Asian Studies from different angles including stateless people, nationalism, gender, economic history, and environmental history. This session will conclude with Reid's presentation on his current project: *Seventy Years of Southeast Asian Studies: An Autobiography in 10 Countries*.

On the second day, the third session of this symposium will discuss the entanglement of people, nature, and commodities. The set of field-based empirical studies will consider how frontier societies formed through commerce have been maintained (or not) in Southeast Asia.

This symposium presents a rare opportunity to engage in critical dialogues with the great historian of Southeast Asia.

プログラム

Day 1: July 22（Sat）

10:00-10:10
Opening Remarks: Kazufumi Nagatsu (Toyo University) and Masao Imamura (Yamagata University)

10:10-12:20
Session 1. Reading *A History of Southeast Asia: Critical Crossroads*
Chair: Waka Aoyama (Tokyo University)

10:10-10:30 "Southeast Asian Genius: How the Region Manages Its Diversity?" Noriyuki Osada (Institute of Developing Economies)

10:30-10:50 "Southeast Asia as Method?" Akiko Iijima (Toyo Bunko)

10:50-11:10 "Towards Mainstreaming Southeast Asia: from the Viewpoints of History Education and Scholarship Review" Shiro Momoki (Osaka University, Vietnam-Japan University)

11:10-11:25 Break

11:25-11:45 "Southeast Asia in Global History: Trade, Economic Growth and the Environment" Kaoru Sugihara (Research Institute for Humanity and Nature)

11:45-12:05 "Social Structures and Historical Conjunctures: A Comparative View from China" Mio Kishimoto (Ochanomizu University, Toyo Bunko)

12:05-12:20 Reply from Anthony Reid

(Australian National University)

13:30-16:50
Session 2. Anthony Reid and Southeast Asian Studies
Chair: Noriyuki Osada
13:30-13:35 Opening remarks: Noriyuki Osada
13:35-13:50 “Stateless Peoples in the Age of Nationalism” Masao Imamura (Yamagata University)
13:50-14:05 “Women in Southeast Asia from High Modernity Onwards” Yoko Hayami (Kyoto University)
14:05-14:20 “Environmental ‘Turns’ in Historiography: Impact on Southeast Asian Studies” Farizah Zakaria (National University of Singapore)
14:20-14:35 “Economic History and the Chinese Century” Atsushi Ota (Keio University)
14:35-15:00 Discussion
15:00-15:20 Break

Chair: Junko Koizumi (Kyoto University)
15:20-16:05 “Southeast Asian Studies in US, Australia and Japan: A Partly Autobiographical Comparison” Anthony Reid
16:05-16:25 Comments: Noboru Ishikawa (Kyoto University) & Michael Feener (Kyoto University)
16:25-16:50 Discussion

17:30-19:00 Reception @ Sky Hall, Toyo University

DAY 2: July 23 (Sun)
10:00-14:30
Session 3. Commodity, People and Frontier: An Alternative Approach to Southeast Asian History in Japan
Chair: Waka Aoyama (Tokyo University)
10:00-10:20 Introduction - "Commodity, People and Nature on the Frontier: An Alternative Approach to Southeast Asian History in Japan" Kazufumi Nagatsu (Toyo University)
10:20-10:40 "Austronesian Inter-island Networks and Marine Resources Use: Cases of Prehistoric Island Southeast Asia and Oceania" Rintaro Ono (National Museum of Ethnology)
10:40-11:00 "Trepang and Manilamen: Sea Cucumbers beyond Southeast Asian History" Jun Akamine (Hitotsubashi University)
11:00-11:20 "Mangroves in History: Gates of Parallel World in Vietnam" Shinji Suzuki (Kinki University)
11:20-11:30 Tea Break
11:30-11:50 "Gambir and its Frontiers in the Southeast Asian Archipelago" Kei Nishikawa (Ishinomaki-Senshu University)
11:50-12:10 "Complex Realities of Sweet Bananas: A Commodity for Thought on the Crossroad between the Philippines and Japan" Masako Ishii (Rikkyo University)
12:10-13:20 Lunch Break
13:20-13:30 Comments from Southeast Asian Studies in Japan: Noriyuki Osada
13:30-13:40 Comments from Commodity and Nature Studies: Farizah Zakaria
13:40-14:00 Comments: Anthony Reid
14:00-14:20 Open Discussion

14:20-14:30
Closing Remarks: Atsushi Ota

抄録

SESSION 1: Reading *A History of Southeast Asia: Critical Crossroads*

"Southeast Asian Genius: How the Region Manages Its Diversity?"

Noriyuki Osada (Institute of Developing Economies)

This presentation seeks to offer a way of reading the book, Anthony Reid's *A History of Southeast Asia: Critical Crossroads*, based on the presenter's experience as its Japanese translator.

In this book, Reid argues strongly for the wholeness of Southeast Asia, despite its unparalleled diversity, because of the coherence running through it. The challenge for him is how to strike a balance between diversity and coherence. He claims at the very beginning of the book that Southeast Asia's "coherence has lain in the fact of diversity, and its genius in managing it". This seemingly contradictory argument, however, is not elaborated any further in a condensed form in the introductory or concluding sections of the book. Rather, through casually interspersing plain keywords throughout the book, the author creates strings to link historical events occurring in different times and spaces and weaves them into a larger narrative of Southeast Asian genius.

In this presentation, I will shed light on a few aspects of this narrative, by identifying some of the keywords and organizing them along two pairs of binary concepts that frame the book: vertical/horizontal and indigenous/foreign. What emerges therefrom is twofold. On the one hand, we find the author's characterization of the region as crossroads where multiple vertical and horizontal relationships -intersect with each other in complex ways. On the other hand, we also see how Reid, while statically defining the geographical scope of Southeast Asia, illuminates the dynamic process of hybridization, synthesis, and vernacularization through which something originally foreign to the region may become recognized as indigenous by the later periods.

"Southeast Asia as Method?"

Akiko Iijima（Toyo Bunko）

The title of my comments, 'Southeast Asia as Method?' is inspired by "Asia as Method," originally proposed by the Japanese Sinologist Takeuchi Yoshimi over sixty years ago. Takeuchi ' s ultimate goal was achieving universal humanity, which transcends the East-West divide. For that purpose he hoped that the concept of "Asia" would play a critical role. "Asia" for Takeuchi, did not reflect reality; the word referred to an ideal or a method.

The point of my reviewing Anthony Reid's *A History of Southeast Asia: Critical Crossroads* is to interrogate the notion of "Southeast Asia" once again. As we know, this name and the idea emerged rather arbitrarily outside the region during World War II. Reid himself acknowledges: "The term 'Southeast Asia' is a twentieth-century invention." The short history of the concept might lead to the claim that Southeast Asia is an externally imposed construct, and this claim may in turn suggest that Southeast Asian Studies has been in identity crisis from the beginning. Reid himself observes: "Conceptually, Southeast Asia became more distinct as it became detached from its neighbors," and today, "its cities looked much like the rest of the post-modern world." And the almost 500 million people inhabiting in this region do not "ever think of themselves as 'Southeast Asians," as Benedict Anderson wrote back in 1998.

Despite all these facts, this book opens with the unequivocal statement: "Southeast Asia was and is a distinct place." And *Critical Crossroads* is subsequently woven into elaborate tapestry-like complexities. To seize this rare opportunity to meet the author, my

simple question is to ask, "What has been the force or motivation driving you to cope with Southeast Asia as a coherent whole all through the time?"

"Towards mainstreaming Southeast Asia: from the viewpoints of history education and scholarship review"

Shiro Momoki (Osaka University, Vietnam-Japan University)

This review will discuss some of the contributions made by Anthony Reid's *Critical Crossroads* as well as what I think remain as unresolved questions. I will do so from the two viewpoints of education and scholarship, paying attention to how to position Southeast Asia not only in world history but also in the world-wide academy.

My review will first summarize the development of Southeast Asian historical studies, to which the author has contributed tremendously. *Critical Crossroads* is arguably the best single-volume textbook of Southeast Asian history available today, as it successfully incorporates, thanks to the author's editorial craftsmanship, a wide range of major themes including recent ones (Sanskrit cosmopolis, strange parallels, Zomia, etc.).

In the second part, this review will focus on the question of how we can further advance *Critical Crossroads*' achievements towards the goal of mainstreaming Southeast Asia in world history—not only in scholarship but also in education. For certain topics----not only of the Sinosphere but also the Mongol Empire, early modern and modern economic development with peasant society, and human reproduction----further dialogue and collaboration with Japanese academia will likely be fruitful. From the viewpoint of academic and educational reform, collective efforts are necessary to provide readings, study materials, commentaries, fieldwork handbooks in order for Southeast Asian history to be pursued in the updated frameworks of competence-oriented learning and "glocal" research. The Kyoto-style scholarship in agriculture (active in the 1970s-1980s) and Confucianist teaching in early modern East Asia will also be mentioned in this presentation for the purpose of identifying some of the areas that need further research.

"Southeast Asia in Global History: Trade, Economic Growth and the Environment"

Kaoru Sugihara (Research Institute for Humanity and Nature)

A History of Southeast Asia, is a masterly synthesis of the history of a region that matters to the world. Thus it can also be read as a contribution to global history. This presentation discusses the ways in which Professor Reid locates Southeast Asia in global history, with reference to early modern, colonial and postcolonial periods.

"Critical crossroads," subtitle, expresses the thread running through the narrative. The region fostered its own social, cultural and economic path of development through trade, human contacts and cultural fusion, without creating a powerful empire, state or civilization. It did not sustain a large population either. But the region was able to deal with Indian, Chinese and Western civilizations by pursuing its role of being critical crossroads. What made this possible?

First, trade and trading networks acted as key organizers of Southeast Asian society. Port cities were unusually effective crossroads

for internal and external commerce and the movement of people. This quality was sustained during the colonial rule, and was temporarily lost after independence, but regained expression in "open regionalism" adopted by ASEAN.

Second, population growth from the nineteenth century led to "extensive growth" (economic growth without technical change) and the absorption of labour, which induced poverty and inequality in the colonial period. But it also prepared for labour-intensive industrialization after the 1960s. This sequence echoes the East Asian path of economic development, but it took place under the more open engagement with the international economy.

Third, the region's environment has been characterized as disaster-prone and resource-rich. Its historical experience of responding to disasters as well as living with rich forests, rivers and seas under globalization and population growth, shows limits and possibilities of human-nature interface. It is directly relevant to the current concern for environmental sustainability in developing countries.

"Social Structures and Historical Conjunctures: A Comparative View from China"

Mio Kishimoto (Ochanomizu University, Toyo Bunko)

In the last several decades, Japanese scholars in the field of Chinese history have been greatly inspired by Southeast Asian studies. In particular, the flexible models of human relationships refuting the rigid image of pre-modern villages, and the description of political and social changes in broad historical rhythms transcending national boundaries, have had a significant impact on Chinese historical research.

In this symposium, I would like to pose two questions to Professor Reid's celebrated work of 2015, with a comparison with China in mind.

The first is the question of the order of local society. The book seems to emphasize that in premodern Southeast Asia, unlike in China, state power was weak and social organizations, such as villages and kinships, were loose, but it does not provide much concrete explanation on how the social order was maintained. In reality, compared with early modern Europe and Japan, Chinese society has more in common with Southeast Asia in terms of openness and mobility. Unlike the Southeast Asian situation, however, the problem of social order was the focus of acute interest and heated debates amongst scholar-officials in late imperial China, and modern researchers of Chinese socio-economic history have also been attracted by this theme. It would be interesting to consider how we should regard the "freedom" of premodern societies of China and Southeast Asia from a comparative perspective.

The second is the question of historical conjunctures. The economic, political, and cultural changes in Southeast Asia during "the Age of Commerce" (i.e., from the 15th to the 17th century) described in this book strikingly coincide with those in East Asia. However, such synchronism appears to diminish somewhat in the later centuries. Examining the reasons for this may contribute to comparative studies on Southeast and East Asia in this transitional period.

SESSION 2: Anthony Reid and Southeast Asian Studies

"Stateless Peoples and Diversity in the Age of Nationalism"

Masao Imamura（Yamagata University）

While Anthony Reid is probably best known for his groundbreaking work on the early modern, his scholarship on the 20th century has also made unique contributions to both Southeast Asian Studies and Nationalism Studies. His concise yet sweeping account of post-colonial political identity among Southeast Asians analyzes the broad trends and profound impacts of nationalism across the region. Reid's account is fuller than others not only because it covers the entire region but also because it
places nationalism in a long history.

According to Reid, nation-making in post-colonial Southeast Asia typically required de-localization and de-vernacularization because the state territory, inherited from the imperial power, was geographically much larger than the existing vernacular communities. That is, Batak, Minangkabau, Sundanese, Balinese, Acehnese, Javanese, Betawi, and Ambronese needed to quickly forge a much broader category called "Indonesia" in the second half of the 20th century. The enormous challenges of nation-making have been overcome only through "a kind of magic—the imperial alchemy" of nationalism. In Imperial Alchemy (2010), Reid emphasizes that this transmutation has been remarkably successful across the region, while noting that Burma/Myanmar as the singular exception. His study also points to the dramatic loss of diversity during the age of
nationalism, however. Detailed case studies presented in Imperial Alchemy describe an irrecoverable loss of linguistic diversity among the hitherto stateless peoples who found themselves in a new state territory. Linguistic and cultural diversities are arguably far more intact in Burma/Myanmar, where nation-making continues to stagger. Does the region's diversity need a different kind of magic for its renowned diversity?

"Women in Southeast Asia from High Modernity Onwards"

Yoko Hayami （Kyoto University）

Southeast Asia in the Age of Commerce (c. 1450-1680) has perhaps been one of the most cited books regarding gender in Southeast Asia. Reid described how women in the region enjoyed considerable autonomy in sexual and marital relations, and played prominent roles in trade, agriculture, diplomacy, ritual and religion. Almost three decades later, in *A History of Southeast Asia: Critical Crossroads* he resituates the argument by considering women and men in "high modernity" in late 20th century Southeast Asia, where masculinity and femininity were deeply affected by the patriarchal puritanism of 19th century Europe. He questions how much the flexibility and gender balance with which he characterized the region prior to this period survived through it. Ultimately, he sees survival and resilience of heterogeneous gender and sexual identities strikingly at odds with western norms, noting also that women in this region more willingly and successfully joined industrial wage labor as well as labor mobility.

Anthropological understanding of gender is founded on understanding of everyday practices, roles, relationships and responsibilities which are full of contradictions and negotiations. Such mundane accounts from women's lives in

family and kin are rarely available in historical documents. From the reading of these works, I find there is a fruitful dialogue between historical interpretation and the anthropologists' textured understanding from the field.

Picking up on the discussion on patriarchal modern families and working women in *Critical Crossroads*, I will end the presentation by discussing the question of how much the "modern nuclear families" have in fact affected the family in the region. Considering the present and future demographic trend in the region with aging in varied rapidity of pace, this is becoming a topic of crucial importance.

"Environmental "Turns" in Historiography: Impact on Southeast Asian Studies"

Faizah Zakaria (National University of Singapore)

Southeast Asian Studies has generally been a field that centres analyses of socio-political change, with the environment as a backdrop for the societal evolution. Contemporaneous with the emergence of environmental history as a disciplinary sub-field in institutions in the United States and Europe around the 1980s, however, scholars of Southeast Asia too began steering the regional ship in the direction of an environmental turn. This "turn" involves taking the non-human seriously as agent, subject and object in historical inquiry and elucidates the dynamics of a nature-culture continuum. How has this turn impacted Southeast Asian Studies? This paper surveys the work emerging from this approach and suggests it has produced multiple fruitful trajectories of inquiry. The first – led by historians such as Anthony Reid, Greg Bankoff and Victor Lieberman – helped position Southeast Asia as an important region in understanding global climactic epochs and geological challenges. The second – developed and led by Leiden historian Peter Boomgaard – reshaped economic histories as an environmental narrative, and in so doing, disrupts the periodization of Southeast Asian history that had hitherto been based on political development. A third and perhaps most recent thread – marked by works by Jonathan Saha, Adam Bobbette, Kathryn Dyt and others - brings culture into the environmental discourse, establishing the continued relevance of Southeast Asia as place in a globalizing world facing the common threat of climate change. Arguably, Southeast Asian Studies as a field of study has benefited from these historiographical developments as attention to the region's environment unmoors the field from its Cold War roots, unsettle political boundaries and help redefine the region in more autonomous terms.

"Economic History and the Chinese Century"

Atsushi Ota (Keio University)

One of the important contributions of Anthony Reid to Southeast Asian studies is his focus on the economic aspect of history based on solid statistical data. This presentation traces his study of commercial activities as an important factor in the integration of Southeast Asia as a region, especially since the Age of Commerce (c. 1450-1680). Extending this point of view further into the following eras, he has identified the period of 1750-1870 as the Chinese century, i.e., a period characterized with active trade and migration of the Chinese, rejecting the hitherto prevailing image of decline and fragmentation. This line of inquiry led Reid to employ the

expression of "economic frontier" to explain the spheres of Chinese activities in his 2015 book. In this presentation, I will attempt to elucidate the overall economic developments in the maritime region during this period, including those of the Bugis and other Southeast Asians by expanding the usage of "economic frontier."

"Southeast Asian Studies in US, Australia and Japan: A partly autobiographical comparison"

Anthony Reid (Australian National University)

My current project, proceeding slowly, is to attempt a survey of the rise and development of Southeast Asian Studies around the world, through a blatantly autobiographical lens, organised by countries. The time of my involvement, 1960-2020, appears to coincide with a particular trajectory of growth, professionalization and globalisation. I do not add 'and decline', because I see it rather as a normalisation, a return of the region's knowledge creation to its own people and universities.

In this talk I will summarize what I am trying to say about just three of these countries:

USA - because it is sometimes seen as the model of area studies, at least for the other two;

Australia - because it is the case in which I was most involved;

Japan – because I need to learn more from this audience before even beginning to write the chapter

This selection has to omit both the beginning (colonial) and end (Singapore and 'normalisation') of the trajectory in question.

SESSION 3: Commodity, People and Nature on the Frontier: An Alternative Approach to Southeast Asian History in Japan

Session 3 constitutes an open dialogue between Prof. Anthony Reid (" Tony " hereafter) and Japanese scholars who do not specialize in history but in other fieldwork-based Southeast Asian studies. The dialogue aims to share and reexamine with Tony and the participants an alternative approach to Southeast Asian History, i.e., a commodity-oriented approach uniquely designed by Prof. Tsurumi Yoshiyuki (1926-94) in Japan in the 1980-90s. The speakers discuss the entanglement of people, nature, and commodities, such as trepang, mangrove products, gambir, and bananas in maritime Southeast Asia, focusing on its frontier. The frontier here addresses a geographic front of or in Southeast Asia and a socio-ecological contact zone where different groups encounter, cooperate with, confront each other, or sometimes form a hybrid social unit in Southeast Asia.

"Introduction - Commodity, People and Nature on the Frontier: An Alternative Approach to Southeast Asian History in Japan"

Kazufumi Nagatsu (Toyo University)

Session 3 constitutes an open dialogue between Prof. Anthony Reid (" Tony " hereafter) and Japanese scholars who do not specialize in history but in other fieldwork-based Southeast Asian studies. The dialogue aims to share and reexamine with Tony and the participants an alternative approach to Southeast Asian History, i.e., a commodity-oriented approach uniquely designed by Prof.

Yoshiyuki Tsurumi (1926-94) in Japan in the 1980-90s. Here we focus on the frontier rather than the center in maritime Southeast Asia. The frontier here addresses a geographic front of or in Southeast Asia and a socio-ecological contact zone where different groups encounter, cooperate with, confront each other, or sometimes form a hybrid social unit in Southeast Asia.

The Japanese speakers reflect on and present the historically repeated entanglement of booming commodities, mobile peoples, and rich but vulnerable tropical natures in maritime Southeast Asia. The entanglement has brought forth the land below the wind very Southeast Asian space. Scholars ever depicted, for example, the diasporic type of settlement, commoditization of natural resources, flexible networking type of social relations, or hybrid ethnic formation as characteristics of the space.

The first speaker, Rintaro Ono, depicts the prehistoric flow of people and materials in the maritime sphere from Southeast Asia to Oceania based on his archaeological research on the migration, subsistence, and inter-island networks during the Neolithic and Metal ages. Focusing on the frontier, the following speakers, Jun Akamine, Shinji Suzuki, and Kei Nishikawa, present their studies focusing on relatively minor global commodities made from natural resources, i.e., trepang, mangrove products, and gambir. Although historians have paid less attention to them than mainstream products such as sugar, tea, or tobacco, these commodities have long shaped typical patterns of the above entanglement on the frontiers in the Southeast Asian maritime world. The last speaker, Masako Ishii, features monocropping bananas, a different commodity from those examined in the former presentations in a way which has become an essential plantation product in the global market and critically altered people-nature relations since the 1960-70s in Southeast Asia.

The basis of our commodity-oriented approach derives from Prof. Yoshiyuki Tsurumi, who pioneered the exciting "think-while-walking" style of Southeast Asia studies by placing the commodity-people interactions at the center of interest in the 1980-90s. He was not or refused to be located in the mainstream of academia. Rather, he engaged in social advocacy to practically criticize the asymmetrical relations between Japan and Southeast Asia. Nevertheless, since he sharply drew the people's everyday lives and histories based on in-depth fieldwork, Tsurumi left a profound academic impact on and inspired his students, including some present speakers.

Due to the scheme mentioned above, the session partially introduces the genealogy of Southeast Asian Studies in Japan spun by Tsurumi and invites Tony to discuss the possibilities of the commodity-oriented approach to Southeast Asian Studies in the future.

"Austronesian Inter-Island Networks and Marine Resources Use: Cases of Prehistoric Island Southeast Asia and Oceania"

Rintaro Ono (National Museum of Ethnology)

This presentation first introduces the Austronesian migration, subsistence, and inter-island networks during the Neolithic and Metal ages both in Island Southeast Asia and Oceania based on the latest Archaeological findings. The inter-island networks developed particularly in the early Metal Age around 2400 and 1800 BP in Island Southeast Asia, including the Wallacea region. The new

technology of production and use of metal and glass materials as well as a variety of knowledge, including religion, were introduced by newcomers and traders from the Asian continent. This age also overlaps with the ancient spice trade that originated in South Asia, and I further discuss the geological area of some inter-island networks in Wallacea and Oceania during this age mainly based on the Archaeological data and materials, including pottery, glass ornaments, metal objects, human mortuary practice, and domesticated animals.

"Trepang and Manilamen: Sea Cucumbers beyond Southeast Asian History"

Akamine Jun (Hitotsubashi University)

Yoshiyuki Tsurumi wrote an award-winning book titled *Namako no Manako* (Eyes of Trepang) in 1990. Trepang are what Indonesian refer to both the live sea cucumbers and the Chinese delicacy made from the dried version. These have no eyes, yet Tsurumi wrote a large-scale history of trepang observing human societies. It was his great challenge to write a history to postulate "maritime trepang routes" connecting northern Australia to Primorskaya Oblas (Maritime Russia) in Northeast China. This presentation revisits Tsurumi's novel and exciting viewpoint to trepang as the main actor in Asian history. While his book placed too much emphasis on north-south vertical flows of trepang from either Northern Australia or Maritime Russia to China, less attention was given regarding the flow of commodities from Oceania to China. This presentation aims at complementing Tsurumi's scope into Western Pacific, where Manilamen, a term referring to seafarers from the Philippine Islands, served as active crews for the Manila Galleons, American fur, and sandalwood trading ships, and whaling vessels in the 19th Century. Some of them engaged in trepang production. They serve as intermediaries between South Pacific islanders and American traders. By highlighting the Manilamen, one can appreciate the important roles Manila played as a frontline for trading activities with China, which will provide a more dynamic view of the Philippines as an ecotone between Southeast Asia and the Pacific.

"Mangroves in History: Gates of Parallel Worlds in Vietnam"

Shinji Suzuki (Kinki University)

In a 1937 report, Maurice Dugros, a Cochinchina Forest Service forester, and wetland forest expert, stated, "The Chinese were the pioneering settlers of this inhospitable environment. The Mangroves were a kind of Chinese conquest." It was not until the so-called Chinese century in Southeast Asia (the mid-eighteenth to mid-nineteenth centuries) that the Chinese began to inhabit the mangroves of Can Gia (a coastal region in Ho Chi Minh City) and Ca Mau in Vietnam. They engaged in commerce, fishing, and forestry and commoditized the resources of the mangrove ecosystem. The products made out of the mangrove ecosystem included dried fish, dried shrimp, mangrove cutch, poles, and charcoal. The Chinese merchants shipped these products to the neighboring cities in Vietnam and China through their trading networks. These situations remained the same even when Vietnam became a French colony and gained independence after World War II. The Chinese could maintain

their mangrove world in parallel with modern Vietnam until the Vietnam War because their livelihood long incorporated the rhythms of the mangrove ecosystem, resonating with the monsoons and tides.

The mangrove ecosystem constitutes an ecotone, a dynamic interface between the marine and terrestrial environments. It is neither sea nor land but a gate between the two. This presentation demonstrates that mangroves are an ecological interface serving as a land-sea gateway and a significant cross-cultural contact zone in the history of coastal wetlands in Vietnam.

"Gambir and its Frontiers in the Southeast Asian Archipelago"

Kei Nishikawa (Ishinomaki Senshu University)

This presentation discusses gambir production as a cash crop and its trade in Southeast Asian Archipelago. Gambir is a species of plant genus *Uncaria* found in Malaysia and Indonesia. It has been used for tanning, dyeing, medicine, and as one of the ingredients for betel chewing. Historically, it had been produced in Sumatra and Malay Peninsula for export to China and Europe from the late 18 century until the early 19 century. From the 1990s until now, gambir also have been produced in Indonesia for export to India as a raw material of paan masala, an instant version of betel chewing in South Asia.

From the late 1990s until now, due to the high demand for paan masala in India, the price of gambir has been rising. Through describing the production and trade of gambir in a village in West Sumatra, Indonesia, this presentation discusses how the beginning of gambir production changed the villager's life. Because firewood is necessary for gambir production, villagers expand their gambir fields by cutting the tree for firewood and planting new gambir seeds. This presentation explores the nature of the frontier society in gambir production by comparing the situation around the strait of Malacca in the late 18 century and the example of my field site in West Sumatra in the 2010s.

"Complex Realities of Sweet Bananas: A Commodity for Thought on the Crossroad between the Philippines and Japan"

Masako Ishii (Rikkyo University)

This presentation features monocropping bananas for exports as a commodity to think about the relationship between the producers in Southeast Asia and consumers across borders. In doing so, it first introduces one of the main works of Yoshiyuki Tsurumi, a book entitled *Bananas and the Japanese: Between Philippine Plantations and Japanese Tables*, published by Iwanami Shinsho in 1982 (in Japanese). The book describes the asymmetrical relationship between the producers in the Philippines, the multinational corporations, and Japanese consumers in a socio-historical context and had a significant impact on the latter to examine their relationship with the people in Southeast Asia critically.

More than forty years have passed since the Bananas and the Japanese publication. The monocropping of bananas for export in the Philippines continues to date. However, many changes have occurred at the production sites after implementing the 1988 land reform law, mainly in the 1990s; the changes included, for instance, the diversification of markets and

the branding of new bananas called “highland bananas.” The paper re-examines the complex realities of the people engaged and

企画者：今村真央、太田淳、長田紀之、長津一史

企画 東南アジア史学会賞受賞者に訊く

この企画はこれまでの東南アジア史学会賞受賞者に受賞後のキャリアを振り返っていただき、ご経験を共有させていただくことで後進研究者のキャリア形成のヒントにしたいという意図から立ち上げたものです。2008 年度（第 6 回）に受賞された山本博之会員にインタビューを受けていただきました。

第 6 回（2008 年度）受賞者インタビュー

回答者：山本博之会員
（聞き手：藤村瞳）

Q: 2008 年に『脱植民地化とナショナリズム：英領北ボルネオにおける民族形成』(2006 年）にて東南アジア史学会賞を受賞されて以降、災害や映画など幅広いテーマにご関心を広げ、それぞれ書籍という形で成果をまとめてこられました。その多様なご研究関心のなかから、まずは災害対応というテーマについて、どのような経緯で取り組まれることになったのでしょうか。また、受賞作での研究関心との関連などもあればお聞かせください。

A: 研究テーマとの出会いには、何かの縁で最初に関わるようになることと、それを研究テーマにしようと自覚することの 2 回の出会いがあると思います。災害対応というテーマとの最初の出会いのきっかけは、博士論文を書き上げた頃に、インドネシア・メダンの日本国総領事館の委嘱調査員になったことです。当時アチェは長く続いていた内戦が一時休戦のようになって、国際社会が「平和の配当」と呼んだ経済開発支援事業を担当する任務でした。ですが、着任して 1 か月で休戦が崩れてアチェに戒厳令が布告され、現地に入ることすら出来なくなってしまったんです。結局、アチェから避難してきた人に対する支援事業を担当することになりました。上司からは橋や道路を整備したり建物を建てたりするような誰でも使えるものが残る支援でなければだめだと言われましたが、自分としては住民どうしが助け合うコミュニティ形成の支援に貢献できたらと考えていました。けれど、それが結局うまくできないまま任期を終えて帰国することになりました。その数か月後にスマトラ沖地震・津波が起きました。私の直接の研究対象はマレーシアでしたが、インドネシアとの関わりもできたというときに、自分のフィールドが大きな危機に見舞われたら地域研究者はどうするべきなのかと考えることになりました。すぐさま現地に急行して救援活動に参加する行動力のある同僚もいましたが、自分にできることは現地情報の収集・発信だろうと考えて、現地語の情報を集めて日本語に翻訳して発信するということをしました。

そのことをしばらくしてから振り返ってみると、東南アジア史学会賞の受賞作の内容と共通した自分の関心の所在に改めて気づきました。つまり、秩序がなくなって先行きのわからない状況に置かれた人びとがどの方向に向かおうかと考えて秩序が組み立てられていく過程への関心です。受賞作では脱植民地化を迎えたサバで、単独で独立するのか、近隣のいずれかの国の一部になるのか先行きが見えない状況で舵取りをしようとする人たちに焦点を絞りました。災害対応では、大きな災害によって社会秩序が崩れてしまったときに、その社会の人たちがどうやって秩序を再編していくのか、そして外部からの支援者はそこにどう積極的に関わっていくのかに自分の関心があると気づきました。これが災害対応というテーマとの 2 回目の出会いでした。

この気づきの経緯を具体的にいうと、現地情報の発信を行っていたときにインタビューを受けて、最後に「この活動を今後どのように研究に発展させていきますか？」と質問されたんです。当時の自分は、これは研究活動ではなくて災害が起きたための一時的な活動で、3 か月したら情報発信は終わりにして研究に戻ると答えました。しかし 3 か月やってみると、要領がわかってくるとともに、やり残した部分もわかってきて、もう 3 か月継続しました。そうするとそれまでと違う側面が

見えてくるものもありました。それまでの私の研究は情報を一文一文読んで、さらに行間も読んで、という情報の扱い方をしていたんですが、大量の情報があるときに中身を全部読むのではなく数量にして全体の傾向を掴むということも考えられるとか、そうやって関心が広がっていって、もう少し災害対応と情報の問題と関わっていくとよいかなと考えるようになりました。

また、災害についての情報発信をしているうちに、緊急支援や医療で現地入りする支援者から現地事情について教えてほしいといわれる機会も増えました。地域研究者としては、そこが元々どういう地域で、どういう民族がいて、どういう歴史があるのかといった内容を想定したんですが、実際に訊かれたのは、イスラム教徒の国で男性医師が女性を診察して問題ないのかといった、あくまで彼らが現地で活動するうえで必要な情報で、地域研究者が提供できる、あるいは提供したい「知」とは違いがあることを強く感じました。先ほど言った6か月間の情報発信の間に、災害支援に関わる異業種の様々な人たちに地域研究者が持つ知見をどのようなかたちで伝えるとよいのだろうかということを課題として考えるようになりました。この思いを進めていったのが災害対応の研究です。

Q: 異業種の方との共同作業をすすめられ、その成果は『災害対応の地域研究』シリーズや雑誌『地域研究』における特集号(2011年)として公刊されていらっしゃいます。その後、災害対応の地域研究という分野への関心の広がりを感じた機会はあるでしょうか。

A: 災害対応の地域研究、あるいはより広く言うと人文社会系の災害対応研究について、関心は広がっていると思います。ただし、研究プロジェクトを進めている最中や、本を出した直後に手ごたえがあったということはあまりなくて、しばらくたってから本を読んだという人たちと共同研究の機会ができたりしたので、研究成果を発信しても手ごたえを実感するには時間差があると思っています。

災害対応に関わる人たちと共同研究する機会は増えましたが、日本の防災関係者に日本以外の事例をどうインプットするかは今でも大きなチャレンジだと思っています。日本と東南アジアの災害対応の関係者が一緒に考えられるといいかなと思うことの一つが、レジリエンスの違いです。東南アジアの災害対応の関係者と話をしていてしばしば話題に上るのですが、日本は耐震・免震の技術も高いしそれを実装する制度も整っているので、同じ規模の災害が起こっても東南アジアと比べると死者は少ないだろうけれど、日本には災害後の孤独死という問題があって、東南アジアではそういった問題はまず発生しないと言うんです。日本は技術や制度の面でレジリエンスが高いのに対して、東南アジアは社会やコミュニティの面でレジリエンスが高くて、二つを組み合わせると総合的にレジリエンスが高められるのではないかと考えていて、二つは組み合わせることができる性格のものなのか、あるいは一方が高いともう一方は低くなるという関係にあるのかといったことを話し合っています。日本と東南アジアでは社会のあり方の違いもあるけれど、共同で考えていけることもたくさんあると思います。

Q: 映画というテーマについても精力的に取り組んでいらっしゃいます。映画に着目するようになった経緯と受賞作との関連があればお聞かせください。また、ご著書『映画から世界を読む』(2015年)は映画をつうじて異文化を理解する面白さと意義を大学生に向けて紹介されていますが、東南アジア地域研究を教えるうえで映画に着目することの利点は何だと思われるでしょうか？

A: 映画との最初の出会いは、マレーシアのヤスミン・アフマド監督の『細い目』を観たときに、すごく良い映画で日本の人たちに紹介したいなと思ったということがまずあります。それを研究するという二度目の出会いは、受賞作のもとになった博士論文の先を考えて

いたことと関わります。博士論文では新聞記事を読み込んで、言語が違う新聞を通じた論戦を分析して、自分たちの社会をどうしたいのかについての考えが組み立てられていった過程を議論したのですけれども、そこで明らかになるのは識字エリートたちの考え、あるいは「文字で書いて読まれる情報」についてでした。これはこれで意味があると思っていますが、他方で字が読めない多くの人たちに共有されていったのは「話して聞かれる情報」であり、そこには前者との緊張関係も存在していたはずです。例えば、元々あった説話や物語を宮廷官吏や植民地官僚が写本にしてそれを収集して比較して「オリジナル」に沿った文書を創り上げる一方で、人びとの側では演劇や歌というかたちで自分たちの好きに語っていき、官製の「オリジナル」をぐちゃぐちゃにして自分たちのオリジナルを作っていくという動きがあると思います。私が関心を持つマレーシアの脱植民地化期にあたる 1930 年代から 50 年代という文脈でいうと、人びとが共通の考えを組み立てる媒体として大きな役割を果たしたのは演劇だろうと思います。ただし演劇は演者と観客の間で一時的に成り立つ関係が肝で、過去に上演された演劇は資料的にアプローチが難しいところがあります。1930 年代から 50 年代はちょうど映画が紹介されて大衆化されていく時期に当たって、演劇の人気演目が映画になって演劇の役者が映画に出演したりしていたので、映画をつうじて演劇にアプローチできるのではないかと考えました。

それと別に映画に関連して考えていたのは、大学で授業をする機会を通じて、地域研究のものの見方や考え方をどう教えることができるかということでした。わかりやすいのは、一緒にフィールドに行って目の前で起きている事象を一緒に見ながら説明するという方法です。ただし、実際に現場に行ってみると、見るものがたくさんあるし、目の前で起きている現象は一度しか起きないので見ていなかったら見返すことができないので、その意味では難しさがあります。その前段階として、見返すことのできる映画は良いと思いました。制作者によって意図的に切り取られた映像であるとはいえ、そこに映っていることのなかで見るポイントを定めて一緒に見て考えることができます。フィールドだと見逃してしまうとそれで終わりですが、映画だと繰り返して見ることができるという利点があります。さらに、意図的に切り取られて編集された映像だとしても、その背景を考えることもできます。この点で、映画は地域研究的な物の見方や考え方を養うトレーニングの一つの材料として良いと思いました。日本人が内向き思考になりがちと言われるなかで、映画を通して異文化を観る目を養って日本の外の世界に関心を持ってもらうことができるのではないかという考えがありました。今も勤務先で映画を使って東南アジア社会の見方を養うという授業をやっています。

Q: 授業での大学生の反応はいかがですか？

A: 反応はいいですよ。最初は映画を観てもどこを見ればいいかわからないという反応が多いですが、会話から家族関係を知るとか、服装から職業や社会階層を想像してみるとか、ポイントを解説してからもう一度映画を観るといったことを重ねていくと、学期が終わるころには学生たちも色々なことが見えるようになってきて、東南アジアに関心を持つようになったといってくれる受講生も多くいます。毎年やっていて楽しいと感じる授業です。

（聞き手：コロナ禍そして円安といった状況のなかで、以前にも増して大学生が海外に足を踏み出すことを躊躇してしまう現況を踏まえると、映画をとおして物事を多角的に見る力をつけて東南アジアのことを知る機会を得る、というのは有意義な手法かと思います。）

外国に行きたがらない学生が増えていると言われる一方で、映画や動画は学生の周りに溢れているので、映像を見たときにどう解釈するのかは肝心なことです。現地に行かない

人が増えたとしても、むしろ行かない人が増えた場合にこそ、映像を読み解く力を養うことは重要だろうと思います。

Q:「ジャウィ文献と社会」研究会の活動についてお伺いします。ジャウィ文献という題材も学会賞受賞の前から取り組んでこられた内容ではありますが、共同研究の継続や、ディスカッション・ペーパーの定期刊行、さらにデータベースも公開されていらっしゃいます。こうした活動の経緯やご苦労された点についてお聞かせください。

A: 博士論文のなかで扱った『カラム』という雑誌が最初のきっかけです。私が研究対象にしたサバは、現在はマレーシアという国のサバ州ですが、行政上の区分であることとは別に、この地域に住む人びとがなぜこの地域を「サバ」という1つの地域だと認識するのかという問いに対して、色々なアイデアを様々な人が持ち寄った結果としてサバという地域概念が形作られたことを論証したのが博士論文でした。それらのアイデアの中にはサバの外から持ち込まれたものもあって、一つの地域概念を創り出すときに自生的な考えだけでなく外から持ってきたものも使うことに興味を覚えました。

その媒体の一つが『カラム』で、外の世界からサバへの橋渡しになった『カラム』にどんなことが書かれていたのかをもっと知りたいと思いました。でも『カラム』はジャウィ文字で書かれているし、政府や宗教指導者を批判していたので不買運動を起こされたりもして、一つの図書館にまとまって所蔵されておらず記事をまとめて読むことができなかったので、『カラム』の記事を集めて読めるようにするといいのではないかと考えました。図書館や文書館で『カラム』を見つけては1号ずつ収集するとともに、2002年ごろから、日本国内の研究会参加者やマレーシア側のカウンターパートと共同で記事をローマ字に翻字していく作業を少しずつ進めていきました。翻字した誌面を共有するプラットフォームを作って、翻字結果などを各々追加していけるようにしました。マレーシアやシンガポールの人たちが使ってくれればと思って、横断検索機能を付けてインターネット上で公開しています。こうした作業は1人ではできないので同じ関心を持つ研究者グループを作るとよいですし、目的と方向性にアイデアがいろいろ出るし、個人の作業の負担が軽減されるし、成果が活用される道筋もできるので、国内だけでやらないで現地の人たちと協力するのがよいですね。

ジャウィ雑誌記事のローマ字翻字のデータベース化をしているという噂を聞きつけた人たちがいて、マレーシアの『蕉風』という華語文芸誌をデータ化しようという話もいただきました。国内の研究者グループを中心に作業をして記事目次を冊子としてまとめたばかりですが、これもマレーシアのカウンターパートの協力があって実現しました。現地のカウンターパートと一緒に作業すると考え方の違いに戸惑うこともあります。ジャウィ文字をローマ字に翻字するという作業では20世紀初めにマレーシアでまとめられた翻字方式がある一方で、アラビア語からの借用語は長母音や綴りなどをアラビア語の原語表記を反映させたいという意見も出ました。でも、アラビア語の借用語でも現在ではマレー語の単語として十分に定着していて、長母音やアラビア語風の綴りにすると検索結果に反映されなくなるので、現在のマレー語しかわからない利用者にも検索しやすくデータベースとして活用してもらうことが最終的な目標であることを考慮して、今の利用者によって扱いやすいという点を重視することにしました。

Q: こんなに多方面に関心を広げて精力的に活動していくモチベーションはどこから湧いてくるのでしょう？

A: 私の研究はマレーシアのサバの人たちについてで、その事例についての記述部分はいったい何人ぐらいが読んで研究の参考にするのだろうかという思いがあります。でも、本

や論文で提示したデータや、本や論文では使わなかったけれど関連するデータや史料はもっとたくさんあって、それは他の研究者も使えるはずなんです。生のデータだけではだめでそれをもとに論を出すところまでいったものだけが学術研究の業績として評価される傾向が強くなってきているように感じますが、その基になっているデータを整理して他の人が利用可能な形で公開することについても学術研究の業績として評価する仕組みがあれば、研究情報の共有が大きく広がって研究も飛躍的に進むはずだという思いが強くあります。その考えが広く共有されるようになることを期待して、手間暇などの面で持ち出しになる部分もあるけれど、まずは自分の身近なところにある研究の基盤になりそうな情報を共有していくと、きっと研究者コミュニティ全体の底上げにつながってまわりまわって私にとっても助けになるはずだと思っています。

Q: 公開されているデータベースは、現地の方からのアクセスというのも多いのでしょうか？

A: はい、結構あります。マレーシアの大学レポジトリで論文検索をすると『カラム』を使った論文を見つけることがあります。それから、サーバメンテナンスで一時的に『カラム』記事データベースを公開休止にしていると、マレーシアの方から「サイトが止まっていて論文が書けなくて困っているけれど、どうなっているのか」という問い合わせが来たりするので、それなりに利用してもらっているようです。ただ、利用者がアクセスしやすくする工夫をするためには利用者の情報を把握することも必要だと思いますが、利用者数の上がり下がりに一喜一憂すると数を増やすために本来必要ない方向の努力をしてしまいそうだと自分で思うので、利用者数は気にしないようにしています。

Q: 最後に、未来の東南アジア地域研究を担う大学院生や若手研究者に向けて、メッセージをお願いします。特に、博士論文執筆を終えた後の次のテーマ設定、博論後の研究の広げ方は多くの研究者が悩む点かと思いますので、ご自身の経験を踏まえて、アドバイスがあればお聞かせください。

A: 博士論文を書き上げたということは、そのテーマについては世界で一番の専門家になったということですから、それは自信をもって誇るべきです。その一方で、その博士論文の弱みを一番良く理解しているのも自分のはずです。なので、その弱みを建設的に批判するとしたらどうなるか、その批判をいつか乗り越えるならばそのためにどういう研究をしていくと良いか、と考えるのが一つの方法だと思います。私の場合は、文献資料を使って識字エリートがどう考えたかについての研究は一区切りをつけることができた、でも書き言葉に慣れ親しんでいない人たちのことを考えるにはどうすればよいかと考えて映画にたどり着きました。すぐには取り掛かれないかもしれないけど、自分の研究の弱みを乗り越えるような研究について考えるというのが一つです。

もう一つは、時間が経つと色々な状況が変わっていくので、色々と目配りしておいて使えそうなものが出てきたら食いつてみるということです。私の場合は、脱植民地化期の映画に込められた社会的な価値の分析を考えたところ、当時は映像アーカイブが整っていなかったので映像資料へのアクセスが難しかったのですが、しばらくしてマレーシアで映画の DVD が流通するようになって映像資料が使えるようになったということがありました。ないと思っていた史料が見つかったり、使いにくかった史料が使いやすくなったりするなど、10 年あるいは 20 年、30 年と時間が経つと研究環境が変わってくるので、博士論文を書いていたときにはできなかったことが研究できるようになる可能性があります。なので、そのときにできるテーマに取り組みながら気長に待ってみるというのも一つのやり方だと思います。

最後の点は、気長に待つ間に関することですが、私が研究とは別の習い事の師匠から教えてもらった例え話から話したいと思います。積み木を高く積み上げるようにと言われたら、まず一つ目を置きますね。次に、二つ目、三つ目とそのまま上に積み上げていくと、高さは高くなるけど倒れやすくなってしまう。そうではなくて、二つ目は一つ目の隣に置くと、高さは変わらない。三つ目もまたその隣に置くと、いつまでたっても高くなっていかない。ある程度したら二段目に重ねていって、二段目もいくつか置いてから三段目を置く。そうすると、時間はかかるけれど、崩れない積み木が出来上がっていって、最終的には高いところまで積み上げることができる。研究も同じで、既に取り組んだテーマからそのまま延長したテーマだけで研究を続けようとしても上手く積みあがっていかないかもしれません。それまでのテーマと違うことをやってみるのも悪くないということです。一見するとそれまでの研究と違うようにみえる内容であっても、自分の研究を振り返って統一的に進んでないようにみえても、後から見ると全体的にまとまりのあるものとして少しずつ積みあがっていく過程かもしれないからです。じゃあいつ一段目から二段目に切り替わればいいのか。それは研究をしていくうちに見えてくるものだろうと思います。私はそういう風に信じて、目の前にある自分の関心が向くテーマに取り組んできたと思います。もし私の経験にいくらかでも参考になりうるところがあるとすれば、自分の研究の弱点を意識しつつも、それと直接関係なさそうにみえるけど関心を持ったテーマにも取り組んでみると、いつかはそれらが統合されて良い方向に向かうと信じて研究に取り組んでください、と伝えたいです。

短報

国際ワークショップ“Plural Pasts for Collective Futures in Burma/Myanmar: Histories of Belonging and Identities (Re) Imagined”に参加して

菊池　泰平　（大阪大学大学院）

国際ワークショップ“Plural Pasts for Collective Futures in Burma/Myanmar: Histories of Belonging and Identities (Re) Imagined”が、2023 年 8 月 27 日・28 日の日程で開催された。本ワークショップは、本学会の藤村瞳会員（愛媛大学）とヨーク大学准教授のアリシア・ターナー(Alicia Turner)氏の主宰により、カナダ・トロント大学で開催された。

ワークショップの参加者として、筆者のような大学院生を含めて、日本とカナダのそれぞれから幅広い世代の研究者が集った。日本側からは、東南アジア学会の会員 6 名とミャンマー人留学生 1 名が、カナダ側からは、トロント大学とヨーク大学で研究している研究者 5 名が発表者として参加した。特筆すべき点として、カナダ側の参加者は、ヨーク大学のアリシア・ターナー氏とトロント大学のマシュー・ウォルトン(Matthew Walton)氏を中核として、ミャンマーの宗教を専門とする研究者たちが集まったことが挙げられる。

このワークショップは、現地語資史料の読解を基にした日本のミャンマー地域研究が、英語圏では十分に知られていない現状を踏まえて開催されたものである。そのため、日本とカナダのミャンマー研究を架橋するべく、宗教や民族、歴史を研究対象としている双方の研究者たちの交流促進が図られた。各セッションでは研究関心の近いカナダ側参加者と、日本側の参加者が 1 名ずつペアを組んで議論を行った。

ワークショップ 1 日目の発表では、①20 世紀初頭の道徳をめぐる論争が、近代的なジェンダー言説を生み出す原動力となったことを論じたもの、② *The Paṭṭhāna Pūjā of Unending Sound* を紹介したもの、③1930 年代から 60 年代におけるヤンゴン華人コミュニティの変遷を、商業団体のリストなどから読み解こうとするもの、④ガンダヨン僧正の記した *The Future of Sāsana* で理想とされる仏教と国家がどのようなものであったのかを問うたもの、⑤シャン仏教を事例として、宗教が少数民族をマイノリティとして実体化することを論じたものがあった。また筆者は、イギリス植民地時代に議論された「連邦制」に関する発表を行った。

ワークショップ 2 日目の発表では、①仏塔などの宗教施設へ入る際に靴を脱がなければならない、いわゆる「シュー・イシュー」をめぐり、1910 年代の政治運動中にみられたビルマ人仏教徒たちと植民地政庁の認識のズレを論じたもの、②反植民地運動で有名なオッタマ僧正を取り上げ、1930 年代における国益を優先するアジア主義のもとで、この僧正の人物像が日本で体よく利用されたと論じたもの、③カレン民族問題を事例として、ビルマ族政治エリートであるタキン党との交渉や摩擦の過程に注目しながら、ミャンマーにおける民族概念の形成過程を構築主義的に捉え直そうとするもの、④現代ミャンマーで自分の帰属コミュニティを同定するためのものとして強く意識される宗教観が、植民地統治によって形成された側面が大きいことを認めつつ、植民地統治下における実態としては仏教徒、ヒンドゥー教徒、イスラム教徒であることが常に別個ではなく、時として重なり合うような状況にあったことを指摘したもの、⑤植民地ビルマにおいて、「バマー・ムスリム」というカテゴリーが実体化されたプロセスを明らかにするもの、⑥ミャンマーにおける「民族（ルーミョウ）」の概念を問い直そうとするものがあった。

ミャンマー社会は、宗教、民族、言語、集団の記憶、アイデンティティの観点から、多様かつ複層性を帯びていて捉えどころがない。一方で、ナショナリズムや、社会規範・道徳、民族表象によって常にどこかで求心性を生み

出す社会でもある。本シンポジウムでは、この両側面を踏まえて、ミャンマー社会をいかに描くことができるのかが大きなテーマとなった。今後、この成果を多言語・多形式で出版することも目指している。具体的には、*Journal of Burma Studies* における特集号や、オンライン研究フォーラム Tea Circle（https://teacircleoxford.com）での一般読者向け記事の公開を予定している。

追悼

「池端雪浦先生を偲ぶ」

内山史子（都留文科大学）

「熱情と受難は等価である。」

1995 年か 96 年頃だったか、まだ西ヶ原にあった AA 研のゼミ室にて、大学院の東南アジア研究の授業のなかで池端先生が語られた言葉である。先生は思想家の言葉を引いて説明なさったのだが、残念ながら誰を引いたのかを思い出せない。その日先生は、passion を日本語でどう訳すかと私たち学生に尋ね、私たちは皆「情熱」と答えたのだが、ただ 1 人フィリピンから留学していたクラスメートが「受難」と答えた。フィリピンで Pasyon（パション）とは、フィリピンのカトリシズムの世界に伝わるキリストの受難詩を言う。その答えを受けて先生は、何かを激しく切望することと、それがもたらす痛みについて熱心に語られた。その日の授業が何の文献を取り上げていたのか、これもまた忘れてしまったのだが、この言葉と先生の強い眼差しは、何度でも思い出す。

これはちょうど、先生がホセ・リサールの祖国と国民概念についての論考を書かれた頃で、先生はリサールの言葉と行動のうちに、まさに「熱情と受難」を読み取っていたのだろうと思う。生涯のテーマであったフィリピン革命についての諸研究で、池端先生は、フィリピンの人びとが何を求めて闘ったのかを理解することを、ずっと追い続けられたように思う。サンホセ兄弟会、リサール、あるいはカティプーナンの言葉を、歴史的なカトリシズムの思想を踏まえて詳細に読み込んだ研究は、先生がよく使われた言葉を借りれば、彼らの「了解の構造」を描き出した、優れた思想史研究である。そして世界を「了解」した先に、「受難」すなわち「死」を引き受けていく心のありように、先生は関心を寄せ続けていたと、私は思う。

同時に池端先生は、史料を積み重ねて、ある時代、ある地域の歴史的世界の全体像を理解することをとても大事にされた。先生は、歴史研究は個別のテーマを通して歴史的世界を再構成してみせなければならないと言い、それを「歴史の匂いがする」と表現なさっていた。あらためて先生の研究を振り返ると、19 世紀の国際情勢、それを踏まえたフィリピンの社会・経済的変化や統治制度の変容などのフィリピン革命「前史」とも言える研究や、フィリピン革命に関わった様ざまな勢力をとらえた研究など、それぞれが膨大な史料と丹念な読み込みに基づいており、その地道さに圧倒される。日本占領期の研究をなさっていた時期に、私は大学院生として先生が研究する姿に間近で接することになったのだが、史料調査に妥協しないことや史料を隅々まで読み込むことなど、ご自身の研究にとても厳しかった。（なおこの頃に、史料を見続けて目を傷めて、文献を読めないと言いながら大学院の授業をなさったことを覚えている。）昔、先生は「私は遅筆なので研究が少ない」とおっしゃったことがあり、駆け出しの院生だった私は「そうなのか」とただ聞いていたのだが、自分で史料にあたり研究を進めるようになってみると、先生の研究の密度の濃さがどれほどのものかを痛感する。

こうして考えると、「熱情」は、池端先生の研究者としての生き方そのものでもあったように思う。先生からうかがう調査の話はとても刺激的だった。農村研究や文化人類学研究の方々に教わり、フィリピンの村落を歩いて距離や時間の感覚を探った話。カトリック信徒が巡礼で登るバナハウ山に自身も登ってみた話。マニラの古文書館で束にして縛られ、隅にほうられていた史料がサンホセ兄弟会のマニュスクリプトだった話。目を輝かせて、楽しそうに話してくださったものだ。先生の歴史研究は、そうして「歩く」なかから生み出されたものでもある。先生はまことに情熱的で、愚直な研究者であられた。その情熱と愚直さをもって、自身の研究のみならず、日本とフィリピン双方の研究者を育て、繋いだ功績も計り知れない。

研究に対する情熱は消えることはなく、東

京外国語大学学長を辞して以降は、フィリピン革命についての研究を一つにまとめることに心血を注がれた。1987 年に『フィリピン革命とカトリシズム』が出版されてから 30 年余り、リサールやフィリピン革命についての新しい視点からの研究に接して、「今」あらためてフィリピン革命研究をまとめることの意義は何かと、お会いするたびに自問を口になさっていた。体調などの制約もあり、「書き直すことはあきらめてまとめる」とおっしゃっていたが、昨年完成した『フィリピン革命の研究』は、先生の研究がフィリピン革命に収斂していく迫力に満ちている。先生が最後に残してくれた宝物のようだと思う。池端先生、本当にありがとうございました。

訃報：バッダン書店主ファン・チャック・カイン氏

新江　利彦
（在ベトナム日本国大使館専門調査員）

2023 年 5 月 22 日（月）、ハノイ市バッダン通り 5 番地の古書店、通称「バッダン書店」の主、ファン・チャック・カインさんの訃報が、フェイスブック「ハノイ・チートゥック」〔河内知識〕などのＳＮＳで拡散され、国内外の数多くのベトナム研究者たちが哀悼の意を表した。享年 88 歳。息子で現店主のファン・アインさんによれば、カインさん・アインさん父子の本籍（原貫）は、13 世紀、元寇の際に活躍した范五老（ファム・グー・ラオ）将軍の故郷、フンイエン省アンティー県フーウン社〔興安省恩施県扶雍社〕。カインさんは元々ハノイ総合大学（現在のハノイ国家大学人文社会科学大学）語文学科司書職員であり、1983 年の退職後、バッダン通り五番地にある自宅で、古書の収集と販売を始めた。わたしが初めてバッダン書店を訪ねたのは、1995 年の夏、西村昌也、山形眞理子の両氏に連れられて行ったのだと思う。トタン屋根の「旧社屋」の最後ごろだったはずだ。古書収集を続けた結果、カインさんの蔵書は数十トンに達し、自宅はその重量で崩壊の危機に陥った。そこで、自宅を建て直し、いまの「新社屋」ができた。バッダン書店の顧客は、ベトナム人のほか、仏、米、中、台、韓、日と幅広く、書店 3 階は小さなサロンになっていて、同じ専門の外国人研究者をカインさんに紹介されたり、古い友人に会ったりすることもままあった。カインさんは本好きであるだけでなく、本を愛する人も好きであり、その値段の付け方が絶妙だった。世界中のベトナム研究者から愛され、尊敬された人物だった。

カインさんの書店が位置するバッダン通りの漢字表記はよくわからない。ホーチミンシティーの華字紙「西貢解放日報」はバッダンを「八壇」と漢字表記する（2021 年 5 月 9 日記事、過客「抱恙領奬記」）。各種の地名考には、元々バッダンであったものが、仏領〔属法〕期にハンチェン〔行盞〕と改められ、独立後に旧名に復したとある。仏領期の旧市街の地名の漢字・字喃（チューノム）表記は、西湖のほとり、保大七年重修鎮北寺紀念碑の中の「十方功徳」碑で確認できるが、ハンチェンやバッダンに相当する地名はない。

西湖のほとりでは、今も昔も、舟遊びが盛んである。19 世紀、阮朝の阮攸（グエン・ズー）に、唐朝の白楽天の「琵琶行」を意識した、「龍城琴者歌」という、西湖の芸妓に取材した詩がある。阮攸にはまた青楼の芸妓から倭寇の徐海の夫人となった王翠翹の半生を描く長編詩「断腸新声」（金雲翹伝）があり、後代の詩人や作家に影響を与えた。「断腸新声」第 66 句「春なかば（ヌアチュン・スアン）、天香の枝、にはかに折れて」は、カイ・フンの代表作の表題にとられた（「春なかば」）。カインさんはカイ・フンら自力文団の作家たちが好きで、バッダン書店にはそのコレクションがあった。開業まもない 1980 年代前半、ここには、ダオ・ズイ・アイン、チャン・ヴァン・ザウ、チャン・クオック・ヴオン、ハ・ヴァン・タン、ファン・フイ・レー氏ら当時の第一級の研究者たちがしばしば訪れたという。歴史学者ダオ・ズイ・アイン、チャン・ヴァン・ザウ両氏の著作をカインさん自身も愛読した。カインさんは、このほかに、哲学者チャン・ドゥク・タオ（トラン・デュク・タオ）、文学者・翻訳者ホアン・スアン・ニー両氏の著作を愛読していた。ここには、古書のほかに、カインさんが編纂した書籍目録と、カインさんと交流した顧客・友人たちのオートグラフと写真が大切に保管されている。日本人ベトナム研究者では、上記の両氏のほか、冨田健次、桃木至朗、八尾隆生、今村宣勝、菊池誠一、阿倍百合子、大西和彦氏らがカインさんの友人だった。

カインさんは、古書の収集と販売のほかに、自身が編纂した書籍目録に基づいて、テーマ別の論文集を作成し、その複写サービスも行っていた。わたしが買い求めたのは「チャンパー王国・チャム族研究」（越文約 70 集、欧文約 40 集）、「越人の南進研究」、「ベトナムの

伝統手工業研究」などの論文集セットだった。このほかにも、ホア族（華人）、ムオン族、タイー族、モン族、ターイ族をテーマとする論文集セットがあった。カインさんは、資料集めに苦労しているたくさんの研究者たちを、物理的に支援するとともに、精神的な支柱でもあった。十五年前、2008 年 5 月 16 日付けのホーチミンシティーの「トゥオイチェー報」記事（クオック・ヴィエト「沈黙書房」）に、カインさんが顧客や友人たちにあてた、励ましの言葉がある：「Tôi nghĩ sách có hồn（わたしは本には魂があると思う）。Nó biết người đáng kính（本は尊敬すべき人を知っている）、hoặc, người đáng kính sẽ tìm đến nó（あるいは、本は尊敬すべき人が自分を見つけてくれるのを知っている」。合掌。

地区活動報告

各地区例会は、新型コロナウィルス感染症の感染状況を鑑みつつ、発表者の地区に関わりないオンラインのみ、対面のみ、または対面とオンラインを併用したハイブリッド形式で開催した。なお、オンライン例会の運営は地区担当理事・委員が交代（または共同）で担当した。

2023 年 4 月~2023 年 10 月までの活動状況は以下の通りである。

オンライン例会

2023 年 7 月 15 日（土）
発表者：澤井志保（京都産業大学）
「MDW 的社会企業？―香港で働いたインドネシア人家事労働者の事例から―」　コメント：小池誠氏（桃山学院大学）

関東地区

2023 年 7 月 9 日（日）
会場：上智大学 13 号館 5 階 512 会議室＋Zoom（ハイブリッド）
合評会『岩波講座世界歴史第 4 巻：南アジアと東南アジア～十五世紀』
趣旨説明：丸井雅子（上智大学アジア文化研究所）
第一部　執筆者による報告
発表者：古井龍介（東京大学東洋文化研究所）
発表者：青山亨（東京外国語大学大学院総合国際学研究院）
発表者：馬場紀寿（東京大学東洋文化研究所）
第二部　書評・話題提供
評者：太田信宏（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）
評者：桃木史朗（大阪大学名誉教授・日越大学教員）
総合討論
司会：松浦史明（日本学術振興会特別研究員・上智大学総合グローバル学部）
※東南アジア考古学会例会、インド考古研究会、上智大学アジア文化研究所と共催

10 月 21 日（土）
会場：上智大学 2 号館 6 階 615a 会議室
第 1 報告：新井悠子（東京外国語大学大学院博士後期課程）
「戦間期ベトナムにおける女性をめぐる議論の一考察―1929 年創刊の『婦女新聞』を中心に―」
第 2 報告：金知雲（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科/博士課程）
「ベトナム共和国における仏教諸団体の動向―1963 年の仏教運動を中心に―」

関西地区

10 月 14 日（土）
会場：大阪大学箕面キャンパス 6 階 603 ＋ Zoom （ハイブリッド）
第 1 報告：渡辺彩加（京都大学大学院総合生存学館博士課程）
「移動後のカテゴリー変更の試み ―2021 年後にミャンマーからタイへ移動した人々に着目して―」　コメント：和田理寛（神田外語大学）オンライン
第 2 報告：中島咲寧（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程）
「インド洋海域世界からみた東南アジアのインド系社会―マレーシアのタミル系ムスリム移民を事例として―」　コメント：長津一史（東洋大学）オンライン

九州地区

2023 年 5 月 14 日（土）
会場：北九州市立大学北方キャンパス　本館 B201 教室
発表者：ウォン・シューフイ（Dr. Janet WONG Shwu Huey／王淑慧、Dept. of Education, New Era University College（新紀元大学学院）, Malaysia）
「Moving from Singularity to Interdisciplinarity: Sharing Experiences in Chinese Education Research in Malaysia」

会員情報

事務局より

１．学会誌『東南アジア―歴史と文化―』の電子アーカイブ化について

1 号から 50 号までの学会誌について、下記 URL にて電子アーカイブが公開されておりますので、よろしくご利用下さい。

https://www.jstage.jst.go.jp/browse/sea/-char/ja/

２．会員情報の変更届について

転居や就職などで会員情報の登録内容に変更がある場合や退会する場合には、すみやかに以下の要領で変更手続きをとってください。

（1）変更届けの提出

学会ウェブサイトを利用する場合、学会ウェブサイトの「会員登録の変更・退会届」のページで変更のある項目を入力して送信してください。電子メールを通じた届けでもかまいません。

Fax や郵便を利用する場合、次ページの「変更・退会届」をコピーして該当事項を記入し、東南アジア学会会員管理係に送付してください。

（2）会員メーリングリストの登録アドレス変更

メールアドレスを変更した場合、上記の変更届と別に会員メーリングリスト（SEAML）に登録したメールアドレスの変更を行う必要があります。学会ウェブサイトの「東南アジア学会メーリングリストSEAML 案内」の「登録変更ページ」で旧アドレスを解除した後、新アドレスの登録を行ってください。

＊退会する場合にはメーリングリストの解除も忘れずにお願いします。

３．学会からの連絡を郵便で受け取りたい場合

本学会からの連絡は基本的にすべて会員メーリングリスト（SEAML）を通じて行っています。郵送による連絡を希望する会員は、「郵送希望書」の提出と、会費と別に郵送手数料（年間2000 円）が必要となります。

退会以外の理由でSEAML から登録アドレスを解除する場合、「郵送希望書」を提出していただかないと学会からのお知らせが届かなくなりますのでご注意ください。郵送を希望する場合は、次ページの「郵送希望書」に必要事項を記入し、東南アジア学会会員管理係に送付してください。同じ内容が記載されていれば電子メールによる連絡も受け付けます。

＊なお、郵送手数料は当該年度の会費とまとめてお支払いくださるようお願いします。

４．入会手続きについて

本学会への入会には本学会の正会員1 名の推薦が必要です。入会を希望する方は、学会ウェブサイトから入会申込書を入手して必要事項を記入し、推薦者の署名を受けた上で、東南アジア学会会員管理係に送付してください。

５．学会ウェブサイトについて

本学会の諸規程、研究大会案内、地区例会案内などについては学会ウェブサイトをご覧ください。なお、2018年5月より学会ウェブサイトは刷新されました。

６．研究大会の報告者募集について

詳細は4月にお送りする研究大会予報をご覧ください。

７．旅費の補助について

研究大会で研究報告を行う若手会員の旅費の一部を補助します。該当者は研究大会での報告が決まったら大会理事にお問い合わせください。

８．会誌への投稿について

会誌『東南アジア 歴史と文化』への投稿を希望する方は、学会ウェブサイトにある投稿に関する諸規程をご覧ください。

９．会費について

年会費は、一般会員8000円、学生会員5000円です。振込先は以下の通りです。

郵便振替口座00110-4-20761 東南アジア学会

なお、郵便局以外の金融機関からの振込みの場合は、以下の口座宛にご送金ください。

口座名「東南アジア学会（トウナンアジアガッカイ）」
店名「〇一九（ゼロイチキュウ）」
店番「019」 口座種別「当座」
口座番号「0020761」

東南アジア学会事務局
〒261-8545　千葉県千葉市美浜区若葉3-2-2アジア経済研究所
長田紀之研究室

Email: jsseas@ml.rikkyo.ac.jp
URL: http://www.jsseas.org/index.html

会員情報係
（株）京都通信社
〒604-0022　京都市中京区室町通御池上ル御池之町 309 番地
TEL　075-211-2340
FAX　075-231-3561
Email　jsseas-db@ml.rikkyo.ac.jp

この用紙に必要事項を記入のうえ、会員管理係に FAX または郵送でお送りください。
（学会ウェブサイトからの変更・退会届提出も可能です）
会員情報係：（株）京都通信社　〒604-0022　京都市中京区室町通御池上ル御池之町 309 番地
Tel: 075-211-2340　Fax: 075-231-3561　E-mail: jsseas-db@ml.rikkyo.ac.jp

住所等の変更・退会届

名前：

□下記の通り会員登録を変更します

現住所：

所属：

職名：

所属先住所：

メールアドレス：

専攻：

研究課題（追加の場合もすべて列挙してください。但し 3 つまで）：

その他の変更：

□退会届

年　　月　　日をもって東南アジア学会を退会します。

署名：

＊会費滞納者の退会は認められませんので、ご注意ください

郵送希望書

学会からの連絡は郵送にて下記の住所に送ってください。
＊どちらかにチェックを入れてください。
□**一般会員**（会費+郵送手数料＝10000 円）
□**学生会員**（会費＋郵送手数料＝7000 円）
名前：

あて先：

東南アジア学会会報　第 119 号
2023 年 12 月発行

発　行　　東南アジア学会事務局（会長　長津一史）
編　集　　東南アジア学会事務局（総務　長田紀之）
所在地　　〒261-8545　千葉県千葉市美浜区若葉 3-2-2
　　アジア経済研究所　長田紀之研究室
Email　　jsseas@ml.rikkyo.ac.jp
URL　　http://www.jsseas.org/index.html
郵便振替　00110-4-20761 東南アジア学会